



Data

監督：ジェームズ・ワン
 原作：DCコミックス『アクアマン』
 出演：/ジェイソン・モモア/アンバー・ハード/ウィレム・デフォー/パトリック・ウィルソン/ドルフ・ラングレン/ヤーヤ・アブドゥル=マティーン2世/ニコール・キッドマン/ルーディ・リン/テムエラ・モリソン/ランドール・パーク/マイケル・ピーチ

👁️👁️ みどころ

“アメコミ”には見飽きたが、「ファースト・マン」が誰のことかわからなかったのと同じように「アクアマン」って一体誰？そう思って調べていくと次第に興味津々・・・。

私の大好きな女優ニコール・キッドマンが出演している上、その世界観は面白そうだ。監督もマレーシア出身の若手のジェームズ・ワン監督だから、海底の世界観の想像は彼の思うがまま・・・？

所詮アメコミ！そういってしまえばそれっきりだが、“兄弟の確執”をテーマとした本作に続いてシリーズ化は間違いなし。こりゃ、しばらくフォローしなければ・・・。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□「アクアマン」ってナニ？アメコミは見飽きたが・・・■□

近時の『スパイダーマン』や『バットマン』をはじめとする「アメコミもの」はさすがに見飽きてしまったが、子供の頃はじめて『スーパーマン』を観たときは大興奮したものだ。その興奮は、最初に『スパイダーマン』を観たときも、『バットマン』を観たときも同じだ。そう考えると、「何でもはじめは面白い！」ことがよくわかる。

しかして、「アクアマン」って一体ナニ？私は本作ではじめて「アクアマン」なる人物(?)と、そのアメコミ上の位置づけを知ったため、「何でもはじめは面白い！」と信じて近時はすべてパスしている「アメコミもの」に挑戦することに。そして、その結果は大満足！

■□この男のキャラは面白い。壮大な世界観にも感服！■□

大満足できたのは、最初と最後に私の大好きなニコール・キッドマンが登場してきたから・・・？たしかにそれもあるが、それだけでなく、何よりも私は、陸と海二つの世界の架け橋となる運命のヒーロー“アクアマン”のキャラクターそのものが面白かった。また、私は『パイレーツ・オブ・カリビアン』のような「海賊もの」が大好きだから、本作に登場してくる潜水艦に乗った海賊デヴィッド・ケイン（ヤーヤ・アブドゥル＝マティーン2世）のキャラも興味深かった。アクアマンの名前を“アーサー”としたのは、そのやんちゃぶりに照らすと、誰からも尊敬されている中世の伝統的なアーサー王に対して少し不敬の誹りを免れないが、まあアメコミの主人公のキャラとしてはそんなもの・・・。彼の“海底人と人間のハーフ”という微妙な立場は有利にも不利にもなるが、さて彼は如何に成長していくの？

他方、本作では人間に対する“海底人”の設定と同じように、海底王国アトランティスという設定も面白い。また、海底王国アトランティスの“秘史”はそれなりの“重み”があるし、アトランティスにある、①アトランティス王国、②ゼベル王国、③砂海王国、④魚人王国、⑤甲殻王国、⑥海溝王国、⑦THE LOST (?) という“7つの王国”による支配権争いという構図も面白い。スピルバーグ監督の『スター・ウォーズ』シリーズは宇宙を巡る壮大な世界観が“売り”だったが、ジェームス・ワン監督の本作では、海底王国アトランティスを巡る壮大な世界観をしっかり味わいたい。

■□■ 2人のキーマンに注目！海底モノの体系化は？ ■□■

本作はアメコミものとはいえ、壮大な世界観に基づく壮大な物語だから登場人物は多い。しかして『アクアマン』シリーズ第1作になる本作で、アクアマン＝アーサー王（ジェイソン・モモア）に重要な影響を及ぼすのは、人間の父親トム（テムセラ・モリソン）と海底人の母親アトランナ（ニコール・キッドマン）の他、アトランティスの王家を守る忠臣バルコ（ウィレム・デフォー）、と平和を求め、水を操る勇敢なる姫メラ（アンバー・ハード）の2人だ。バルコはアトランティス王国の参謀だが、子供の頃のアーサーを戦士に鍛え上げるべく教育した恩師。そして、メラはオーム王（パトリック・ウィルソン）による海の支配と地上の侵略を防ぐべくアクアマンに助けを求めに来た、同盟国ゼベルの王女だ。

ジェームズ・ワン監督のこの設定は極めて自然で、私にも十分納得できる。マレーシア生まれのジェームズ・ワン監督は1977年生まれの若手だが、スピルバーグ監督が『スターウォーズ』（77年～）で“宇宙もの”の世界観を確立させ体系化させたように、彼が今後も続くであろう本作のシリーズにアクアもの、海底ものの体系化に成功させるのでは・・・。

■□■ ささまざまなキャラと海底バトルに注目！ ■□■

考えてみれば、イギリスのJ. R. R. トールキンの大河小説を映像化した『指輪シリー

ズ』の最初は『ロード・オブ・ザ・リング／旅の仲間』(01年)、『シネマ1』29頁)だった。そのシリーズは『ロード・オブ・ザ・リング／二つの塔』(02年)、『シネマ2』54頁)、『ロード・オブ・ザ・リング／王の帰還』(03年)、『シネマ4』44頁)と続いたが、次第に飽きてきたのは仕方ない。

本作では、海底で活発に動いている七つの王国を統一して、“オーシャンマスター”への道を目論むオーム王を中心とするさまざまな海中バトルが面白いが、ウルトラマンもどきの怪獣(?)が登場してくると私はうんざり。また、本作ラストには、初代王のアトランすら恐れた海獣“カラゼン”が登場してくるが、その姿は、あなたのお好みに合う?合わない?

■□■テーマは兄弟の確執!その論点もしっかりと!■□■

セシル・B・デミル監督の『十戒』(57年)はモーゼの「十戒」とモーゼ率いるイスラエルの民のエジプトからの脱出について海が割れる大スペクタクルが見モノだが、その前半のテーマは兄弟の確執だった。そして、その確執はユル・ブリンナー扮する兄のラメシスが正当なエジプトの王家の血筋だったのに対し、弟のモーゼは殺害から免れるため、ゆりかごに乗せてナイル川に流された男の子だったために生まれたものだった。他方、『坂の上の雲』では生涯を通じて秋山好古、真之兄弟の仲の良さが際立っていたが、兄弟の確執を描いた映画は多い。エリア・カザン監督の『エデンの東』(55年)における兄アーロンと、弟ケイレブ(愛称キャル)もそうだった。

しかして、本作もテーマは兄弟の確執で海底王国を力で統合しようとするオーム王にメラヤバルコが危機感を抱きアクアマンに助けを求めようとしたところから帝国統一の物語と共に兄弟の確執の物語が進んでいくことになるので、それに注目!ド派手な海底バトルのスペクタクルもいいが、シリーズ第1作になる本作ではそんな論点もしっかりと!

2019(平成31)年2月18日記